

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第262集

西近津遺跡群

NISHITIKATU

西近津遺跡ⅩⅡ

長野県佐久市長土呂西近津遺跡ⅩⅡ発掘調査報告書

2019.3

佐久市教育委員会

第1節	経過と立地	1
第2節	調査体制	2
第3節	検出遺構・遺物の概要	3
第II章	遺構と遺物	3
第1節	住居址	3
第2節	掘立柱建物址	12
第3節	土坑	14
第4節	ピット	16
第5節	黒色帯	17
第6節	遺構外・試掘出土遺物	18
第III章	まとめ	21
表		18
図版		22
抄録		
奥付		

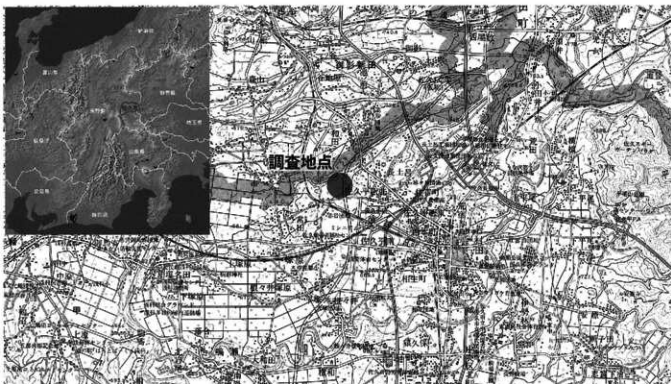
第I章 発掘調査の経緯

第1節 経過と立地

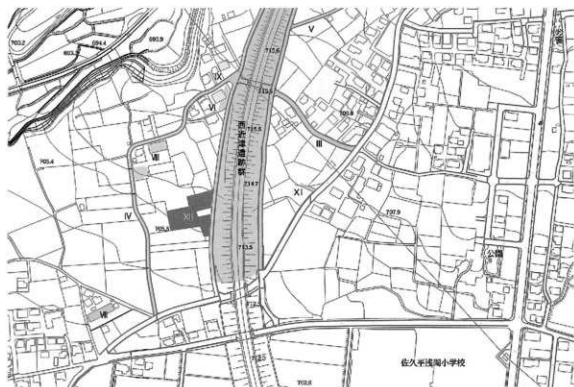
西近津遺跡XIIは佐久市長土呂字森下地籍に所在する。遺跡は北西を田切に、南東を浸食が進まずに田切を形成しなかった緩やかな谷地形に挟まれた台地上に立地する。遺跡内では過去に、佐久市教育委員会による11次に及ぶ発掘調査と、中部横断自動車道建設に伴う長野県埋蔵文化財センターの発掘調査が行われている。何れの調査に於いても数多くの遺構・遺物が検出されており、特に長野県埋蔵文化財センターの調査では、長辺18mを測る弥生時代後期の巨大な竪穴住居址や、古代の銅製私印、鏡瓦などが出土し、注目された。以上の調査事例により、西近津遺跡は縄文時代中期



表土掘削作業



第1図 西近津遺跡XIIの位置(1:50,000)



第2図 調査地点周辺の過去の調査位置(1:2,500)

後半から人々の活動が認められるようになり、後期には集落が営まれるようになる。その後、弥生時代後期に至る間は人間の生活痕跡は認められていないが、後期に入ると規模の大きな集落が形成される。しかし古墳時代に入ると集落規模は縮小、あるいは断絶する期間も認められるようになり、後期に入り再び大規模な集落が形成され、平安時代まで継続する。中世には鷲林城に関係するのであろう遺構が存在することが明らかとなってきた。

今回、遺跡内で株式会社木内工務店により宅地造成が計画されたことから、遺跡の保護を目的とし、状況を把握するための試掘調査を平成30年6月29日に実施した。その結果、住居址等の遺構が検出されたため、遺構の破壊が予測される道路箇所について記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。なお、宅地部分については埋土保存とした。

第2節 調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教 育 長	棚澤晴樹
事務局	社会教育部	部 長	青木 源
	文化振興課	課 長	小林義夫
		企 画	武者新一
		係 長	塩川宏幸
文化財調査係		係	小林眞寿 富沢一明 上原 学 久保浩一郎
			岩下 琴(6月まで) 萩原義治(7月から)
		臨時職員	森泉かよ子
		調査担当者	小林眞寿
		調 査 員	甘利隆雄 岩松茂年 大矢志慕 小林喜久子
			小林節子 小林敏雄 堺 益子 清水律子
			田中ひさ子 花岡美津子 細谷秀子 堀籠滋子
			宮川真紀子 山口ひとみ 柳澤孝子
			柳澤千賀子 山田叔正 油井満芳

第3節 検出遺構・遺物の概要

遺構 竪穴住居址11軒 掘立柱建物址4棟 土坑1基 ビット22基

遺物 縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 灰軸陶器 緑軸陶器 石器・石製品 鉄器

第II章 遺構と遺物

第1節 住居址

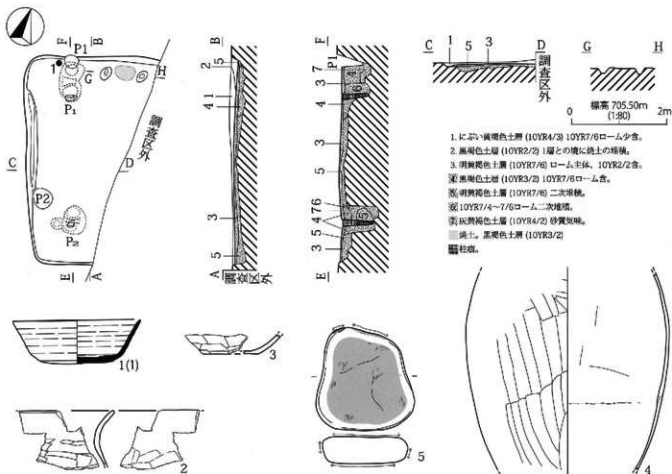
● H1号住居址(第3図)

調査区東端で検出された。調査区外に延びるため全容は不明である。長軸方位をN-18°-Wにとり、長軸長4.42m、壁残高0.16mの規模を有する。カマドは掘方状態で破壊されていた。西壁下中央部分には周溝が存在するが、他の部分には認められない。2基検出されたビットは主柱穴であり、柱痕はφ13cmの規模であった。

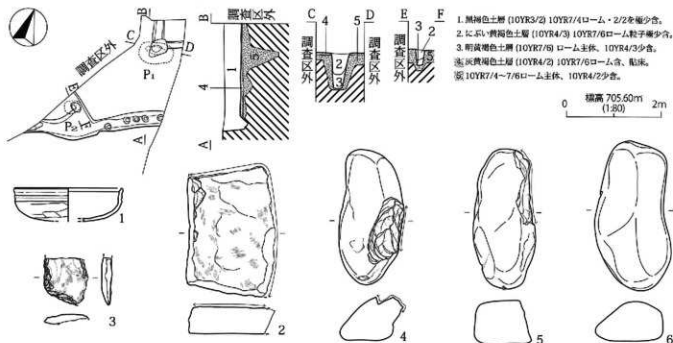
遺物は須恵器、土師器、石器・石製品が出土している。須恵器は坏が1点出土している。ロクロからの切り離しはヘラである。土師器は武蔵甕が3点出土している。2と4は同一個体の可能性が強いが、接合しない。石器・石製品は磨・敲石が1点出土した。5面の磨面と端部に1ヶ所敲打痕が認められる。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅱ期に比定され、8世紀Ⅱ四半期の実年代が想定される。

なお、本址は中部横断道建設に伴い長野県埋蔵文化財センターが調査を行った、西近津遺跡群SB0303住居址と同一の住居址である。



第3図 H1号住居址

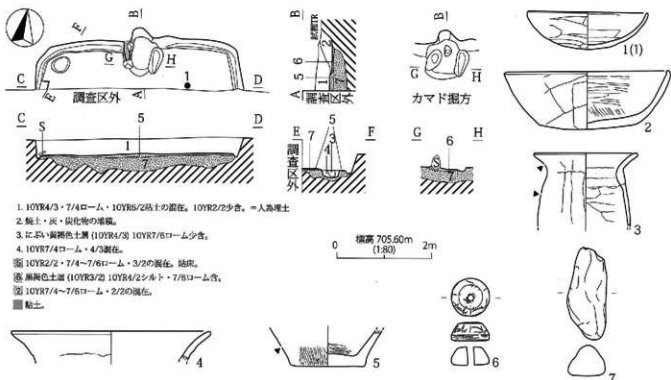


第4図 H2号住居址

● H2号住居址(第4図)

H1号住居址に切られ、その北側に検出された。調査区外に延びるため一部が検出されただけであり、全様は不明である。壁残高0.36m以外の規模は不明である。2基検出されたピットのうちP1は主柱であり、北と東から間仕切り溝が連結されている。検出部分では、壁下に周溝が巡らされていた。

遺物は土師器、石器・石製品が出土している。土師器は図化可能な1点のみを掲載した。外面体部下がヘラケズリのほかはナデ調整が施されている。石器・石製品は台石、打製石斧、編物石が出土している。打製石斧は混入品である。



第5図 H3号住居址

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の古墳時代Ⅳ期に比定され、7世紀代の実年代が比定される。

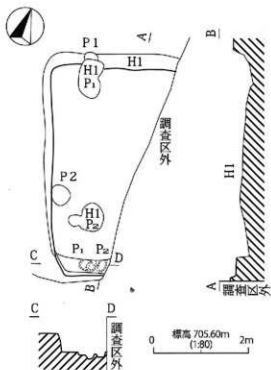
本址は、中部横断道建設に伴い長野県埋蔵文化財センターが調査を行った、西近津遺跡群3020と同一の遺構である。

● H3号住居(第5図)

H1号住居の南西に検出された。他遺構との重複関係は有さない。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。N-9.6°-Wに長軸方位をとり、短軸長4.42m、壁残高0.33mの規模を有する。北壁の中央部分には石芯を粘土で被覆したカマドが構築されていた。カマド部分を除く壁下には周溝が巡っている。1基検出されたピットの用途は不明である。覆土は人為埋土であった。

遺物は土師器、弥生土器、石器・石製品が出土している。土師器には坏と甕の器種が認められる。2点出土した坏の内、1は「北武蔵型の坏」で、2は所謂「畿内系暗文坏」と同様な形態であるが、暗文は施されない。甕も2点出土しており、4は武蔵甕、5は外面に縦方向のヘラズリが施される小型甕である。弥生土器は混入品の甕底部が出土している。石器・石製品は紡錘車と編物石が各々1点出土した。紡錘車の側面に認められる線刻については文様あるいは文字なのか、製作時あるいは使用時に生じた傷なのか判断しかねる。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅰ期に比定され、8世紀第Ⅰ四半期の実年代が想定される。



第6図 H4号住居

● H4号住居(第6図)

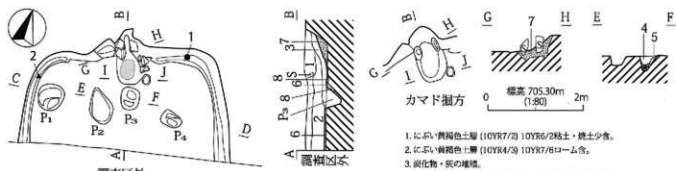
本址はH1号住居の旧住居であり、支柱はH1号住居の掘方において検出されている。住居の平面規模は僅かに大きいようである。掘方で検出された2基のピットの性格・帰属は不明である。遺物はほぼ皆無であった。

● H5号住居(第7・8図)

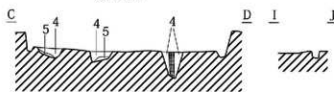
本址は調査区の中央や西より検出された。南側に調査区外に延びるため全容は不明である。H6・7号住居、D1号土坑を切っている。N-18°-Wに長軸方位をとり、短軸長4.43m、壁残高0.4mの規模である。北壁の中央には石芯を粘土で被覆したカマドが構築されていた。カマド部分を除く壁下には周溝が巡る。4基検出されたピットの内P4は支柱穴で、φ13cmの柱痕が確認された。

遺物は土師器、須恵器、灰軸陶器、緑釉陶器、石器・石製品、鉄器・鉄製品が出土している。土師器には坏(1~8)、碗(9~11)、耳皿(12)、甕(17)の器種が認められる。坏、碗のロクロからの切り離し方法は回転糸切である。内面調整はヘラミガキ→黒色処理ないし、暗文→黒色処理である。坏7には墨書が認められる。碗の高台はロクロ切り離し後に貼付された付高台である。耳皿は耳部分の破片である。甕はロクロ甕であり、武蔵甕は認められない。灰軸陶器は碗(13・14)と皿(15)の器種が認められる。施釉はツケガケによる。緑釉陶器(16)は見込みに陰刻文が施される碗の底部片が1点出土した。須恵器は同一個体と思われる凸帯文付四耳甕の肩部分(18)と底部片(19)が出土している。石器・石製品は台石(20・21)、磨石(22)、磨・敲石(23)、編物石(24)が出土している。鉄器・鉄製品は刀子(25~27)、紡錘車の軸(28)、鎌(29・30)、鉄塊(31)が出土した。

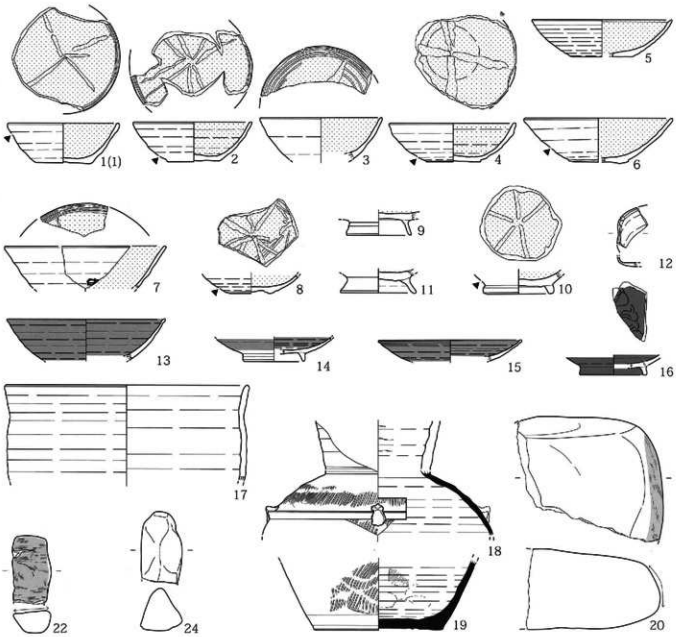
以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅶ期に比定され、10世紀前半の実年代が想定される。



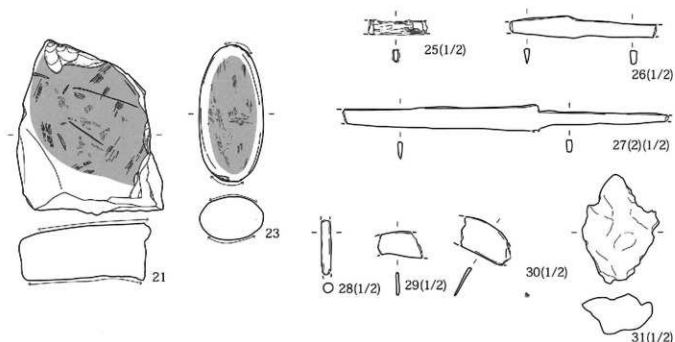
調査区外



1. に近い黄褐色土層 (10YR7/2) 10YR6/2粘土・焼土少量。
 2. に近い黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム含。
 3. 炭化物・灰の堆積。
 4. に近い黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム粒子少量。
 5. 明確褐色土層 (10YR7/8) ローム主体、10YR4/3少含。
 6. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/4~7/6ローム粒子含。
 7. 黄褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/6ローム粒子少量。カマド積土。
 8. に近い黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR7/6ローム含。
 9. 粘土。
 10. 黒褐色土層 (10YR3/2) 柱礎。



第7図 H5号住居址(1)



第8図 H5号住居址(2)

●H6号住居址(第9図)

本址は調査区の中央で検出された。H5号住居址、D1号土坑、ピット9に切られる。南北西方向が調査区外に延びるため全容は不明である。N-10.5°-Wに長軸方位をとるものと推測される。短軸長6.0m、壁残高0.68mの規模である。支柱は床面上に均等に4基配置されるP1~P4であり、φ15cmの柱痕が確認された。壁下には周溝が巡り、P1とP4は周溝からの間仕切り溝で連結されている。掘方の調査で、現住居址よりも僅かに規模が小さな住居の痕跡が確認されており、本址は拡張して建て替えが行われたことが判明した。

遺物は土師器、須恵器、石器・石製品、鉄器が出土している。土師器には、環(1~3)、高環(4・5)、甕(12・13)の器種が認められる。環3、甕13は混入品である。環は2点共に半球状の形態で、内面はヘラミガキ→黒色処理が施され、外面はヘラケズリ後にヘラミガキやナデ調整が施されている。高環は内面にヘラミガキ→黒色処理、外面にはヘラケズリ調整が施される。脚は空洞である。甕は外面ヘラケズリ、内面ナデ調整が施される長胴甕であり、最大径を体部に有している。須恵器環(6・7)、坏蓋(10・11)は混入品である。環(8・9)は受部を有している。石器・石製品は凹石(14)、編物石(15)、磨石(16~18)、磨・敲石(19)の器種が認められる。鉄器は(20)の短頸鎌が1点出土している。

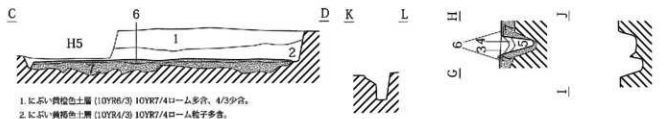
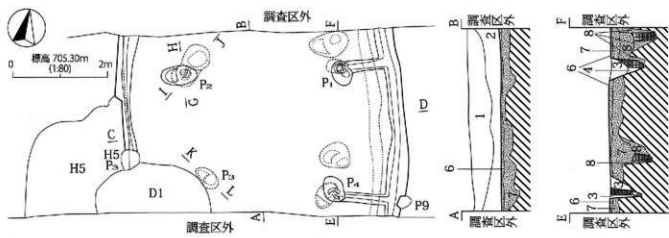
以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の古墳時代Ⅳ期に比定され、7世紀代の実年代が想定されている。

●H7号住居址(第10図)

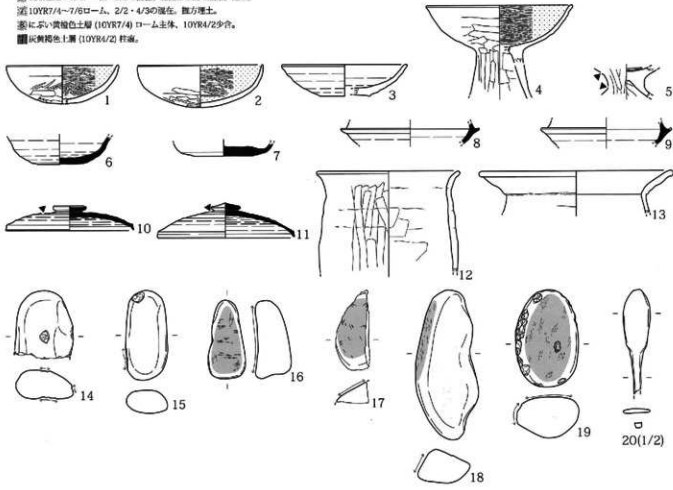
本址はH5・6号住居址の西で検出された。H5号住居址に切られている。北方向に向かい調査区外に延びるため全容は不明である。N-11.4°-Wに長軸方位をとり、短軸長5.12m、壁残高0.75mの規模である。壁下には断続的に周溝が巡り、掘方から検出されたP4、P5は支柱穴と考えられる。各々2基が重複していることから、本址は少なくとも1回の建て替えが行われたものと推測される。南壁下中央に構築されたP2は出入口施設である。

遺物は土師器、須恵器、石器・石製品、鉄器が出土している。土師器には環(1)と甕の器種が認められる。環は半球状の形状で、内外面にヘラミガキ調整が施される。甕(3)はロクロ甕であるが、混入品と思われる。須恵器は環(2)が1点出土している。底部へら切り、ヘラケズリ調整のものである。石器・石製品は敲石(8)や磨石(6・7)、編物石(4・5)が出土している。鉄器は長頸鎌(9)が1点出土している。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代のⅠ期に比定され、8世紀第Ⅳ



1. 灰に多い黄褐色土層 (10YR6/3) 10YR7/4ローム多含、4/3少含。
 2. 灰に多い黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/4ローム多含。
 3. 灰に多い黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム多含。
 4. 灰に多い黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/4ローム多含。
 5. 10YR4/3・2/2・7/4-7/6ローム多含。
- 10YR2/2・7/4ローム・5/3の存在、土層は3層の版築、粘土。
 注 10YR7/4-7/6ローム、2/2・4/3の存在、灰方埋土。
 雲に多い黄褐色土層 (10YR7/4) ローム主体、10YR4/2少含。
 ■ 灰黄褐色土層 (10YR6/2) 付属。



第9図 H6号住居址

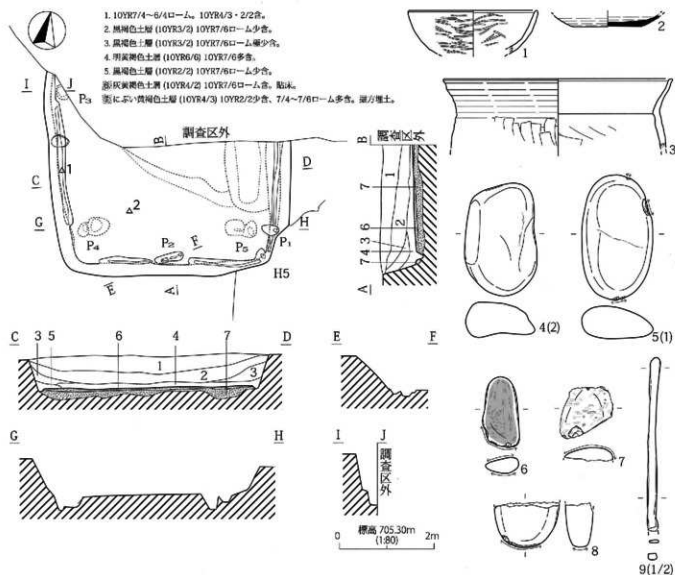
半期の実年代が想定される。

●H8号住居址(第11・12図)

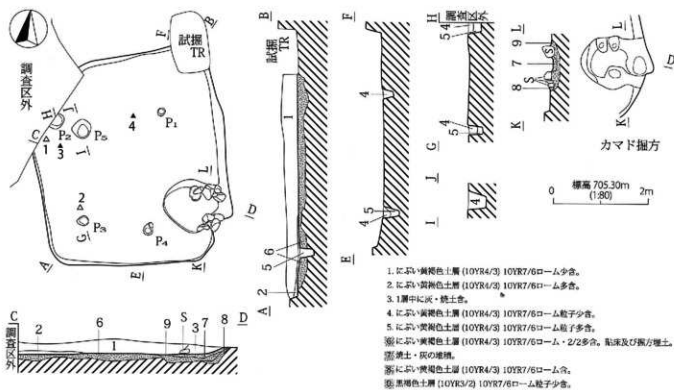
本址は調査区西側で検出された。H9・10・11号住居址を切っている。北西隅が調査区外に延びており、全容は不明である。N-6.02°-Wに長軸方位をとり、長軸長4.43m、短軸長4.06m、壁残高0.31mの規模である。カマドは東南隅に石芯を粘土で被覆して構築されているが、粘土部分はほとんど残存していなかった。床面上に5基検出されたピットの内、P2を除く4基が支柱穴である。柱痕は確認出来なかった。

遺物は土師器、灰釉陶器、石器・石製品、鉄器が出土している。土師器には坏(1~4)、碗(5~8)、片口(9)、仏鉢(10)、甕(12~13)の器種が認められる。坏の内面調整はヘラミガキないし、暗文→黒色処理であり、ロクロからの切り離しは回転糸切である。4には墨書が認められる。碗も内面調整、ロクロからの切り離しは坏と同様であり、高台は付高台である。片口は口縁部片であり、詳細は不明である。仏鉢はロクロ成形によるものであり、外底周辺にヘラケズリ調整が施されている。甕は全てロクロ甕であり、小型の13は平底の外底に右回転の糸切痕が認められる。灰釉陶器は11の碗の底部片が1点出土している。石器・石製品は砥石(14)、編物石(15~16)、磨石(17)、使用痕有剥片(18)の器種が認められる。鉄器は刀子(19)、紡錘車(20)が出土した。*19の刀子には、木質が付着残存していた。

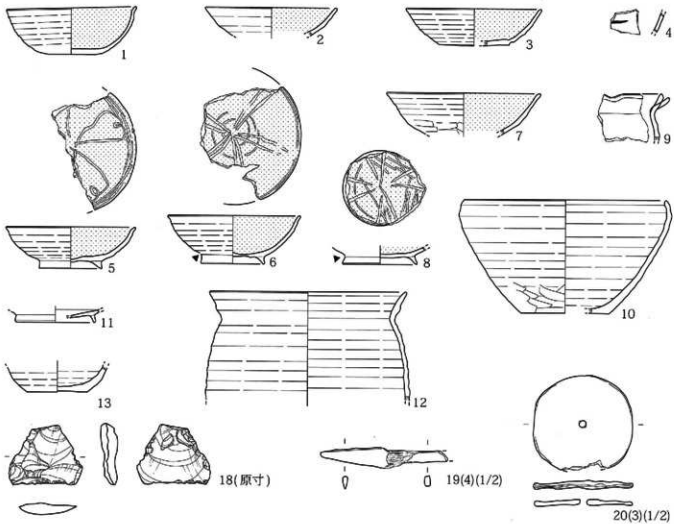
以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代のⅦ期に比定され、10世紀前半の



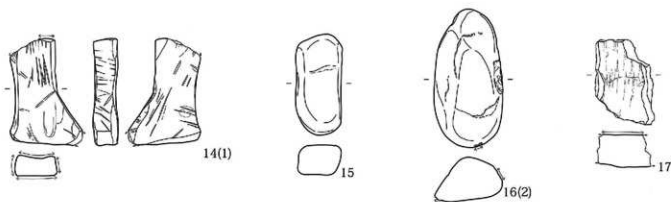
第10図 H7号住居址



1. 灰・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム少量。
2. 灰・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム多量。
3. 1層中に灰・焼土。
4. 灰・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム粒子少量。
5. 灰・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム粒子多量。
6. 灰・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム・2/2多量。灰炭及び灰方埋土。
7. 灰土・灰の堆積。
8. 灰・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム多量。
9. 黄褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/6ローム粒子少量。



第11図 H8号住居址(1)



第12図 H8号住居址(2)

実年代が想定される。

●H9号住居址(第13図)

本址はH8号住居址南で検出された。H8号住居址、F3号掘立柱建物址に切られる。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。N-24.9°-Wに長軸方位をとる。短軸長4.54m、壁残高0.42mの規模である。カマドは北壁の中央に構築されており、軸部分は地山の削り出しである。これに石芯を設置し、粘土で被覆していたものと思われるが、粘土はほとんど残存していなかった。ピットは6基検出されているが、床面上で検出されたP1~P3の3基が主柱穴である。カマド部分を除く壁下には周溝が巡らされていた。

遺物は土師器と石器・石製品が出土している。土師器は小型の甕(1・2)が2点出土した。1は内面ヘラケズリ→ナデ、外面ヘラケズリ調整が施され、2は内面ナデ、外面ヘラケズリ調整が施されている。石器・石製品は編物石(3~6)、磨石(7)、石製模造品の素材(8)が認められる。

以上の出土遺物から、本址は聖原編年の古墳時代Ⅳ期に比定され、7世紀代の実年代が想定される。

●H10号住居址(第14図)

本址はH8号住居址西で検出された。H8号・H9号住居址に切られる。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。N-30.7°-Wに長軸方位をとり、長軸長5.4m、短軸長5.11m、壁残高0.47mの規模である。調査範囲にはカマドは存在しなかった。2基検出されたピットは何れも主柱穴であるが、柱痕は確認できなかった。壁下には周溝が巡らされていた。

遺物は土師器と石器・石製品が出土している。土師器には、坏(1)と甕(2)の器種が認められる。坏は半球状の形態で、内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリ→ヘラミガキ調整が施される。甕は長胴甕の胴部片で、内面ナデ調整、外面ヘラケズリ調整が施されている。石器・石製品は磨石(3~5)が3点出土している。

以上の出土遺物から、本址は聖原編年の古墳時代Ⅳ期に比定され、7世紀代の実年代が想定される。

●H11号住居址(第15図)

本址は調査区北端で検出された。H8号住居址に切られる。東方向に調査区外に延びるため全容は不明である。N-15.1°-Wに長軸方位をとり、長軸長3.37m、壁残高0.51mの規模である。北壁中央部分には石芯を粘土で被覆したカマドが構築されていたが、掘方状態で破壊されていた。ピットは床面上、掘方を含め11基検出されたが主柱穴は判然としない。周溝は認められなかった。

遺物は土師器、灰軸陶器、石器・石製品が出土している。土師器には坏(1・2)、碗(3)、甕(6・7)の器種が認められる。坏1は内面に粗いヘラミガキ→黒色処理、2は暗文→黒色処理が施される。ロクロからの切り離しは右回転の糸切である。碗3は外面に刻書と思われる線刻が認められる。甕は2点共にロクロ甕である。内面ナデ、外面にはヘラケズリ調整が施される。須恵器は4の坏が1点出土している。ロクロからの切り離しは回転糸切で、内面に火漉が認められる。灰軸陶器は5の碗が1点出土している。石器・石製品は8の打製石斧の基部片、9の編物石、10の磨石が出土した。

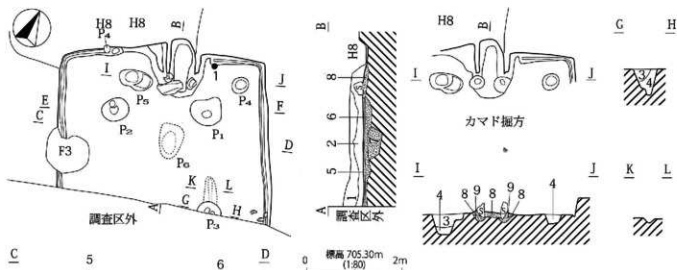
以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代のⅦ期に比定され、10世紀前半の

実年代が想定される。

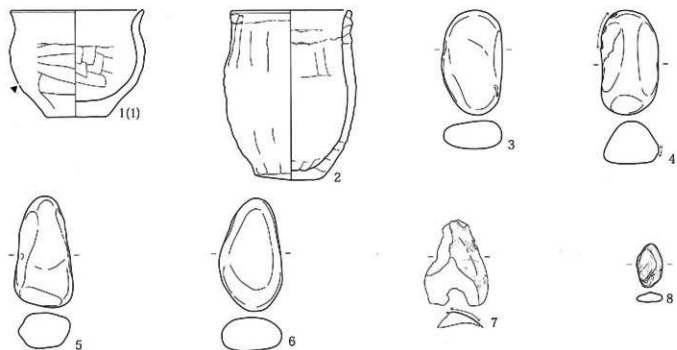
第2節 掘立柱建物址

● F 1号掘立柱建物址(第16図)

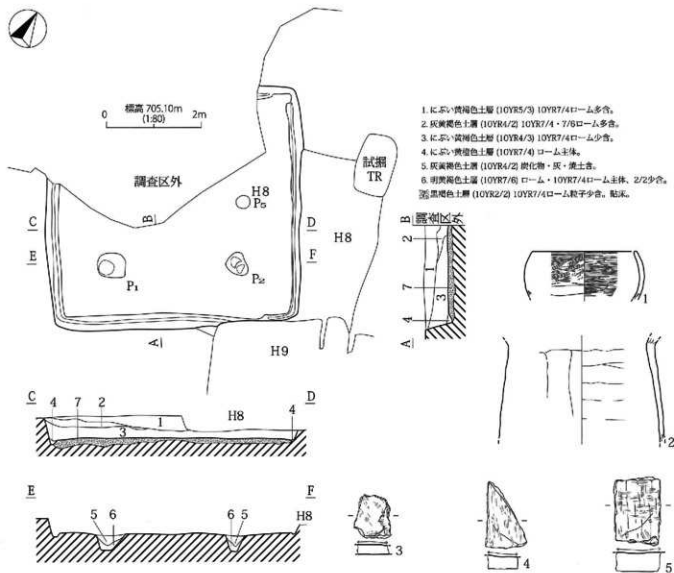
H3号住居址の北西で検出された。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。P8に切られている。梁間の柱列が1列検出されただけであるが、N-26.3°-Wに長軸方位をとるものと推測



1. 赤い黄褐色土層 (10YR6/4) シルト質、10YR7/6ローム・2/2粒子少含。
2. 赤い黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR2/2・7/6ローム含。
3. 赤い黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム粒子少含。
4. 赤い黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR7/4~7/6ローム含。
5. 赤い黄褐色土層 (10YR7/4) ローム主体、10YR4/3少含。筋状。
6. 赤い黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR7/4~7/6ローム多含。龍方埋土。
7. 10YR7/4ローム・2/2・4/3混在。
8. 赤い黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム粒子含。
9. 10YR3/2・4/3・7/6ローム混在。カマド埋方埋土。



第13図 H9号住居址



第14図 H 10号住居址

される。梁間長4.0m、柱痕 ϕ 16cm、梁間柱間寸法2.0mの規模である。
時期を特定出来る遺物の出土はなかった。

● F 2号掘立柱建物址(第17図)

F1号掘立柱建物址の西に隣接して検出された。F4号掘立柱建物址を切る。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。N-27.6°-Wに長軸方位をとるものと推測される。梁間長3.13m、柱痕 ϕ 23cm、梁間柱間寸法1.56mの規模である。

時期を特定出来る遺物の出土はなかった。

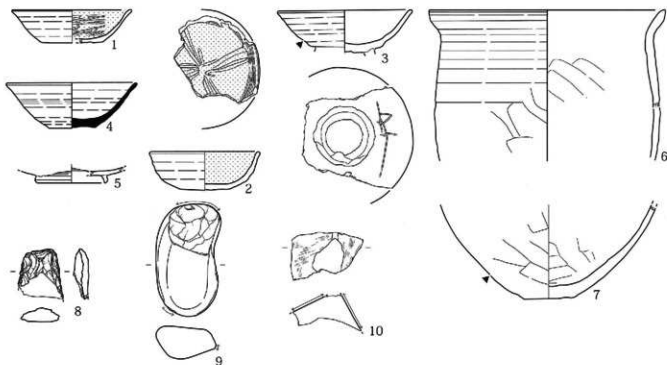
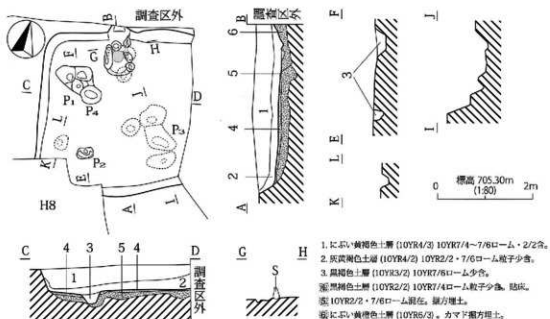
● F 3号掘立柱建物址(第18図)

調査区西端部で検出された。H9号住居址を切る。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。N-68°-Eに長軸方位をとる。桁行長5.19m、柱痕 ϕ 18cm、桁行柱間寸法1.3mの規模である。柱穴の平面形は長方形で、断面は逆梯形の形態である。

時期を特定出来る遺物の出土はなかった。

● F 4号掘立柱建物址(第19図)

F2号掘立柱建物址に切られる。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。N-24.4°-



第15図 H11号住居址

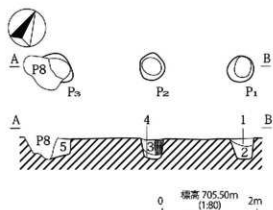
Wに長軸方位をとるものと推測される。梁間長2.96m、梁間柱間寸法1.48mの規模である。時期を特定出来る遺物の出土はなかった。

第3節 土坑

●D1号土坑(第20図)

本址は調査区の中央やや西よりで検出された。南側に調査区外に延びるため全容は不明である。H5号住居址に切られている。N-11.5°-Wに長軸方位をとるものと思われる。短軸長2.0m、深度1.0mの規模である。

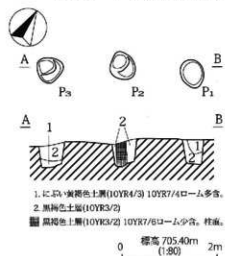
遺物は須恵器、石器・石製品が出土した。須恵器には坏と甕の器種が認められる。坏(1)はロクロから右回転系切で切り離されている。甕(2)は底部片で、内外面にロクロナデが施される。石器・石



1. におい・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/4ローム多量。
2. におい・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/4ローム含。
3. におい・黄褐色土層 (10YR4/3) 砂粒多量。
4. 灰褐色土層 (10YR5/2) 砂層。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/6ローム少含。

■ 黒褐色土層 (10YR3/2) 砂粒含。柱礎。

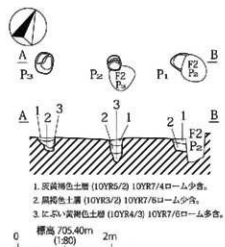
第16図 F1号掘立柱建物址



1. におい・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/4ローム多量。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2)

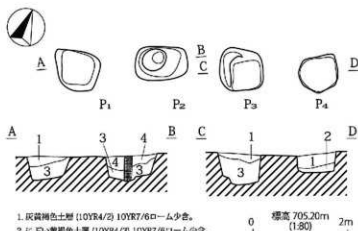
■ 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/6ローム少含。柱礎。

第17図 F2号掘立柱建物址



1. 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 10YR7/4ローム少含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/6ローム少含。
3. におい・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム多量。

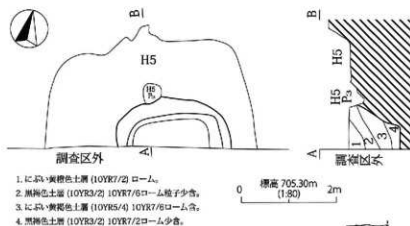
第19図 F4号掘立柱建物址



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/6ローム少含。
2. におい・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム少含。
3. におい・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム多量。
4. 10YR7/4~7/6ローム主体、4/3含。

■ 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 柱礎。

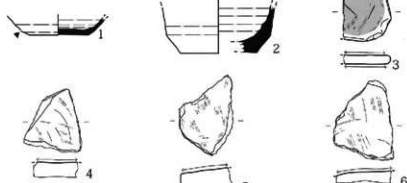
第18図 F3号掘立柱建物址



1. におい・黄褐色土層 (10YR4/3) ローム。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/6ローム粒少含。
3. におい・黄褐色土層 (10YR5/4) 10YR7/6ローム含。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/6ローム少含。

■ 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/6ローム少含。柱礎。

第17図 F2号掘立柱建物址



1. におい・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム多量。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/6ローム少含。
3. におい・黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/6ローム多量。

■ 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/6ローム少含。柱礎。

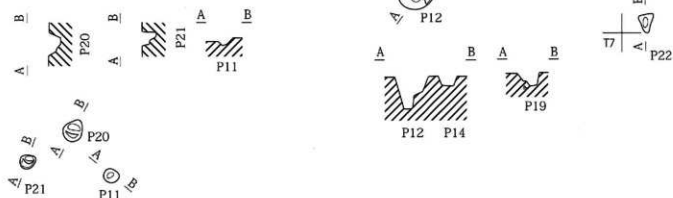
第20図 D1号土坑

製品は磨石が(3~6)4点出土している。

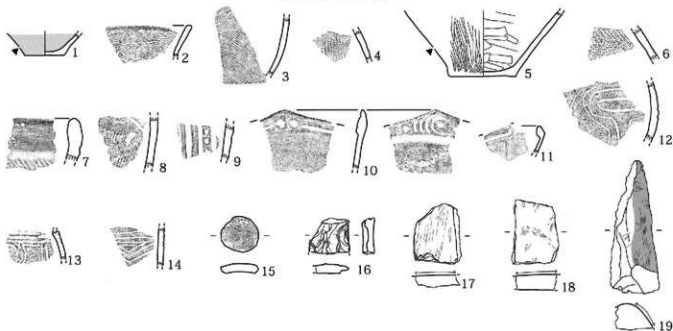
本址の年代は遺構の重複関係から、H5号住居址の年代である10世紀前半以前と考えられる。



標高 705.20m
(1.80) 2m



第22図 ビット(2)



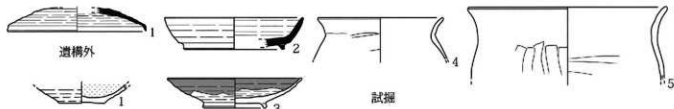
第23図 黒色帯出土遺物

いづれのビットからも遺物は出土しなかったため、年代は不明である。

第5節 黒色帯(第23図)

調査区西北端部分に堆積していた黒色土部分には、縄文時代中期末～後期前半、弥生時代後期の遺物が内包されていた。調査範囲内では、遺構は確認出来なかったが存在するものと思われる。

遺物は、1が弥生時代後期の内外面赤彩の鉢、2～3が弥生時代後期の甕であり、2が櫛描波状文、3が櫛描斜走文、4は縄文が施文される。4は吉ヶ谷系の土器と思われる。5・6は弥生時代後期の壺であり、5は底部片、6はヘラ描斜走文が描かれた、頸部片である。7～14は縄文土器である。7



第24図 遺構外・試掘出土遺物

～9が中期末～後期初頭、10～13が堀之内Ⅰ式、14が堀之内Ⅱ式である。15は縄文時代後期の深鉢土器の体部片を再利用した土器片円盤である。16は打製石斧の破片、17～19は磨石である。

第6節 遺構外・試掘出土遺物(第24図)

遺構外出土遺物としては1の須臾器片蓋1点が図化可能な遺物であるが、図化不可能な遺構外出土遺物も極めて少量であった。試掘出土遺物は本調査に先立ち実施された遺構確認調査時に出土し

第1表 住居址計測表

図号	遺構名	方位	長さ	幅	厚さ	説明	備考	
H 1	H2・4号住居址を切る	N-18°-W	4.42	-	0.16	カマド、竈溝	H 4は旧住居。柱礎径φ13cm	
H 2	H1号住居址に切られる	-	-	-	0.36	溝溝、間仕切	古瓦	
H 3	-	N-9°6'-W	4.42	0.33	1	カマド、竈溝	古瓦	
H 4	H1号住居址に切られる	N-18°-W	4.47	-	0.13	2	H 1の旧住居	
H 5	D1号土坑、H6・7号住居址を切る	N-18°-W	-	4.43	0.40	4	カマド、竈溝	
H 6	H5号住居址に切られる	N-10.5°-W	-	6.00	0.68	7	溝溝、間仕切	柱礎径φ13cm
H 7	H5号住居址に切られる	N-11.4°-W	-	5.12	0.75	5	溝溝、出入口	柱礎径φ15cm、建て替え認められた
H 8	H9・10・11号住居址を切る	N-6.02°-W	4.43	4.06	0.31	5	カマド	裏面溝カマド
H 9	H8号住居址、P3号竈立柱建物址に切られる	N-24.9°-W	-	4.54	0.42	6	カマド、竈溝	古瓦
H 10	H3号・8号住居址に切られる	N-30.7°-W	5.40	5.11	0.47	2	溝溝	古瓦
H 11	H8号住居址に切られる	N-15.1°-W	-	3.37	5.10	11	カマド	古瓦

第2表 掘立柱建物址計測表

図号	遺構名	方位	長さ	幅	厚さ	説明	備考
P 1	P8に切られる	N-26.3°-W	-	4.00	0.16	-	2.00
P 2	P4を切る	N-27.8°-W	-	3.13	0.23	-	1.56
P 3	H9を切る	N-6.8°-E	5.19	-	0.18	1.30	-
P 4	P2に切られる	N-24.4°-W	-	2.96	-	-	1.46

第3表 土坑計測表

図号	遺構名	方位	長さ	幅	深さ	説明	備考
D 1	H5に切られる	横円	N-11.5°-E	-	2.00	1.00	-

第4表 ビット計測表

図号	遺構名	方位	長さ	幅	厚さ	説明	備考
P 1	H1号住居址を切る	円形	0.30	0.29	0.57	-	0.75
P 2	H1号住居址を切る	楕円形	0.45	0.40	0.18	-	0.47
P 3	-	楕円形	0.40	0.29	0.32	-	0.47
P 4	-	楕円形	0.57	0.44	0.27	-	0.48
P 5	調査区外にのびる	-	0.42	-	0.12	-	0.70
P 6	調査区外にのびる	-	-	0.54	0.29	-	0.56
P 7	調査区外にのびる	-	0.59	-	0.64	-	0.49
P 8	P1号掘立柱建物址を切る	楕円形	0.91	0.56	0.44	-	0.49
P 9	-	楕円形	0.55	0.32	0.32	-	0.50
P 10	-	楕円形	0.27	0.15	0.15	-	0.35
P 11	-	楕円形	0.33	0.28	0.15	-	0.39
P 12	-	楕円形	0.75	0.55	0.70	-	0.75
P 13	P16を切る	楕円形	0.47	0.38	0.27	-	0.47
P 14	-	楕円形	0.47	0.39	0.22	-	0.48
P 15	-	楕円形	0.48	0.40	0.44	-	0.70
P 16	P13に切られる	楕円形	0.70	0.50	0.53	-	0.56
P 17	-	楕円形	0.56	0.39	0.25	-	0.49
P 18	-	円形	0.49	0.45	0.13	-	0.49
P 19	-	円形	0.49	0.46	0.28	-	0.50
P 20	-	楕円形	0.50	0.42	0.24	-	0.35
P 21	-	楕円形	0.35	0.31	0.29	-	0.39
P 22	-	楕円形	0.39	0.32	0.12	-	-

第5表 H 1号住居址出土遺物観察表

No	名称	形状	口径(φ)	底径(φ)	高さ(φ)	重量(g)	内面	外面	備考	出土層位
1	須臾器	坏	13.6	8.00	4.80	-	ロクロナデ	回転ヘラ切	完全実測	No.1
2	土師器	武蔵煮	-	-	< 5.8 >	-	ナデ	破片実測	-	I区
3	土師器	武蔵煮	-	-	< 2.1 >	-	ナデ	ヘラケズリ	破片実測	I区
4	土師器	武蔵煮	-	-	< 21.0 >	-	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	I区
5	石器・石製品	磨・破石	10.9	10.4	2.90	615.0	-	磨面S、端部に磨打痕	完全実測	II区

第6表 H 2号住居址出土遺物観察表

No	名称	形状	口径(φ)	底径(φ)	高さ(φ)	重量(g)	内面	外面	備考	出土層位
1	土師器	坏	(11.6)	(11.4)	< 3.5 >	-	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	E区
2	石器・石製品	台石	< 13.8 >	< 9.5 >	< 3.0 >	730.0	上層～右側欠損、使用面Ⅰ	-	完全実測	覆土
3	石器・石製品	打製石斧	< 5.0 >	< 4.6 >	< 0.9 >	30.2	上部・裏面欠損、磨減痕有	-	完全実測	覆土
4	石器・石製品	磨物石	14.3	6.9	4.6	603.0	使用痕有	-	完全実測	覆土
5	石器・石製品	磨物石	14.8	6.6	4.9	722.0	使用痕有	-	完全実測	覆土
6	石器・石製品	磨物石	15.8	8.2	4.4	850.0	-	-	完全実測	覆土

第7表 H3号住居址出土遺物観察表

No	器 具 器 形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	重 量 (g)	備 考	内 装	外 装	備 考	出土層位
1	土師器 杯	12.6	12.6	4.0	—	—	ナデ	ヘラケズリ	完全実測	No1
2	土師器 杯	17.6	10.3	6.1	—	—	ヘラミガキ	ヘラケズリ	完全実測	W区
3	土師器 甕	(11.0)	—	< 7.8 >	—	—	ナデ	ヘラケズリ	簡転実測	P1
4	土師器 武藏甕	(21.2)	—	< 3.1 >	—	—	ナデ	ヘラケズリ	簡転実測	W区
5	赤土器 鉢	—	7.9	< 3.8 >	—	—	ナデ	ヘラミガキ	完全実測	W区極方
6	石器・石製品 紡錘車	4.0	2.6	2.0	51.3	—	—	—	完全実測	E区
7	石器・石製品 編物石	9.7	4.3	3.6	192.8	—	—	—	完全実測	E区

第8表 H5号住居址出土遺物観察表

No	器 具 器 形	口径 (長)	底径 (短)	高さ (厚)	重 量 (g)	備 考	内 装	外 装	備 考	出土層位
1	土師器 杯	(11.9)	6.0	4.3	—	—	陶文→黒色処理	簡転糸切	完全実測	No1
2	土師器 杯	(12.7)	5.5	4.2	—	—	陶文→黒色処理	簡転糸切	完全実測	E区
3	土師器 杯	(13.0)	—	< 4.4 >	—	—	陶文・ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	簡転実測	カマド
4	土師器 杯	(13.4)	5.8	4.1	—	—	陶文→黒色処理	簡転糸切	簡転実測	W区
5	土師器 杯	(14.8)	6.5	3.9	—	—	ミガキ→黒色処理	簡転糸切	簡転実測	E区
6	土師器 杯	(15.8)	6.3	4.8	—	—	ミガキ→黒色処理	簡転糸切	完全実測	Pa-O1・W区
7	土師器 杯	(17.2)	—	< 4.5 >	—	—	陶文・ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	簡転実測	E区
8	土師器 杯	—	5.6	< 2.0 >	—	—	陶文・ミガキ→黒色処理	簡転糸切	完全実測	W区
9	土師器 碗	—	(6.9)	< 2.4 >	—	—	ミガキ→黒色処理	簡転糸切、付高台	簡転実測	E区
10	土師器 碗	—	7.5	< 2.3 >	—	—	陶文→黒色処理	ロクロナデ	完全実測	E区
11	土師器 碗	—	(8.1)	< 2.4 >	—	—	ミガキ→黒色処理	簡転糸切	簡転実測	E区
12	土師器 耳皿	—	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	破片実測	E区
13	灰陶甕形 碗	(18.9)	—	< 4.4 >	—	—	施釉 (ツケガケ)	施釉 (ツケガケ)	簡転実測	E区
14	灰陶甕形 碗	—	(6.4)	< 2.6 >	—	—	施釉 (ツケガケ)	付高台、施釉 (ツケガケ)	簡転実測	E区
15	灰陶甕形 皿	(15.2)	—	< 2.3 >	—	—	施釉 (ツケガケ)	施釉 (ツケガケ)	簡転実測	カマド
16	緑釉陶器 碗	—	(7.0)	< 2.1 >	—	—	施釉 (ツケガケ)	付高台、施釉	簡転実測	E区
17	土師器 口ク口壺	(26.0)	—	< 10.1 >	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	簡転実測	カマド・E区
18	須恵器 凸帯文付四耳壺	—	—	< 12.0 >	—	—	当片底ナデより再治	体部耳目、凸帯・耳輪付	簡転実測、10と同一番号	E・W区
19	須恵器 凸帯文付四耳壺	—	(13.8)	< 7.5 >	—	—	当片底ナデより再治	耳目	簡転実測、10と同一番号	E・W区
20	石器・石製品 台石	< 13.2 >	< 15.6 >	< 8.5 >	< 2545.0 >	—	左側→下製欠損、使用痕1	—	完全実測	E区
21	石器・石製品 台石	18.6	15.6	6.4	2735.0	—	正置に築造、磨打痕、使用痕2	—	完全実測	E区
22	石器・石製品 磨石	< 7.3 >	< 4.2 >	< 2.3 >	< 114.9 >	—	下部欠損、磨面1	—	完全実測	E区
23	石器・石製品 磨石・敷石	14.5	6.8	4.7	680.0	—	両端欠損、磨面2	—	完全実測	E区
24	石器・石製品 編物石	< 7.6 >	< 4.4 >	< 4.5 >	< 187.0 >	—	下部欠損	—	完全実測	E区
25	鉄器 刀子	< 3.1 >	< 0.8 >	< 0.4 >	< 1.9 >	—	両端欠損、茎部木貫付痕	—	完全実測	E区
26	鉄器 刀子	< 7.8 >	1.1	0.4	< 7.5 >	—	両端欠損	—	完全実測	E区
27	鉄器 刀子	< 17.3 >	< 1.3 >	< 0.5 >	< 16.9 >	—	両端欠損	—	完全実測	No2
28	鉄器 紡錘車軸	< 2.9 >	< 0.5 >	< 0.5 >	< 1.9 >	—	両端欠損	—	完全実測	W区
29	鉄器 鎌	< 2.4 >	< 1.3 >	< 0.15 >	< 2.2 >	—	両端欠損	—	完全実測	E区
30	鉄器 鎌	< 3.2 >	< 1.7 >	< 0.2 >	< 2.9 >	—	両端欠損	—	完全実測	E区
31	鉄器 鎌	5.8	4.1	2.1	52.8	—	—	—	完全実測	E区

第9表 H6号住居址出土遺物観察表

No	器 具 器 形	口径 (長)	底径 (短)	高さ (厚)	重 量 (g)	備 考	内 装	外 装	備 考	出土層位
1	土師器 杯	(12.0)	—	(4.1)	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ・ヘラミガキ	簡転実測	I・IV区
2	土師器 杯	(13.4)	—	4.5	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	完全実測	I区
3	土師器 杯	(13.4)	(5.4)	< 3.3 >	—	—	ロクロナデ	簡転糸切	簡転実測	II区
4	土師器 高杯	(15.6)	—	< 9.5 >	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	簡転実測	I・II区
5	土師器 高杯	—	—	< 3.2 >	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	完全実測	IV区
6	須恵器 杯	—	(6.0)	< 3.0 >	—	—	ロクロナデ	簡転ヘラ切	簡転実測	II区・D1
7	須恵器 杯	—	(19.2)	< 1.4 >	—	—	ロクロナデ	ヘラ切・ヘラケズリ	簡転実測	D1
8	須恵器 杯	—	—	< 2.3 >	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	簡転実測	III区ホリ
9	須恵器 杯	—	—	< 2.7 >	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	簡転実測	I区
10	須恵器 坏蓋	(12.9)	—	2.6	—	—	ロクロナデ	天井部簡転ヘラケズリ	完全実測	III区ホリ
11	須恵器 坏蓋	(13.8)	—	3.7	—	—	ロクロナデ	天井部簡転ヘラケズリ	完全実測	I・IV区
12	土師器 甕	(15.2)	—	< 10.7 >	—	—	ナデ	ヘラケズリ	簡転実測	I・II区
13	土師器 甕	(20.6)	—	< 4.6 >	—	—	ナデ	ヘラケズリ	簡転実測	I区
14	石器・石製品 編物石	< 7.2 >	< 6.2 >	< 3.2 >	< 199.1 >	—	正置に凹	—	完全実測	IV区
15	石器・石製品 編物石	9.5	4.5	2.7	180.3	—	使用痕有	—	完全実測	IV区
16	石器・石製品 磨石	8.3	4.0	3.8	149.0	—	磨面1	—	完全実測	I区
17	石器・石製品 磨石	< 8.5 >	< 3.6 >	< 2.3 >	< 68.8 >	—	金剛欠損、磨面1	—	完全実測	IV区ホリ
18	石器・石製品 磨石	15.9	6.7	3.5	485.0	—	磨面1	—	完全実測	ケン
19	石器・石製品 磨石・敷石	10.3	6.7	4.4	370.0	—	磨面1、縁部に磨打痕	—	完全実測	I区ホリ
20	鉄器 短刀	< 5.6 >	1.4	< 0.3 >	< 5.7 >	—	茎部欠損	—	完全実測	I区

第10表 H7号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・装 飾		備 考	出土部位
			口径(φ)	底径(φ)	高さ(φ)	容量等	内 面	外 面		
1	土師器	環	(13.8)	—	<4.6>	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅳ区
2	須家器	環	—	(7.2)	<1.4>	—	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ区
3	土師器	ロクロ環	(24.4)	—	<7.5>	—	ナデ	体部下半ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ区
4	石器・石製品	礫物石	12.0	7.7	3.7	520.0	—	—	回転実測	No2
5	石器・石製品	礫物石	13.2	7.6	3.5	500.0	—	使用痕有	完全実測	No1
6	石器・石製品	磨石	7.5	4.0	1.6	67.1	—	磨面2、下段部に敲打痕	完全実測	Ⅳ区
7	石器・石製品	磨石	<5.5>	<5.6>	<1.4>	<52.9>	—	全周欠損、磨面1、敲打痕	完全実測	ケン
8	石器・石製品	敲石	<4.8>	<6.8>	<3.0>	<142.2>	—	上部欠損、端部に敲打痕	完全実測	Ⅲ区、ホリ
9	鉄器	長板鏝	<9.2>	<0.5>	<0.4>	<5.9>	—	基部欠損	完全実測	Ⅳ区

第11表 H8号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・装 飾		備 考	出土部位
			口径(φ)	底径(φ)	高さ(φ)	容量等	内 面	外 面		
1	土師器	環	13.8	(5.1)	4.9	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転系切	完全実測	ホリ、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区
2	土師器	環	(14.0)	—	<3.0>	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	覆土
3	土師器	環	(14.4)	(7.4)	3.9	—	—	黒色処理	回転実測	掘方
4	土師器	環	—	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	蓋蓋「?」	破片実測	Ⅳ区
5	土師器	環	(13.8)	(6.6)	4.4	—	暗文→黒色処理	付高台	回転実測	Ⅰ区
6	土師器	環	(14.1)	6.6	5.1	—	暗文、ヘラミガキ→黒色処理	付高台	完全実測	Ⅰ・Ⅳ区
7	土師器	環	(16.4)	—	<4.4>	—	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	覆土
8	土師器	環	—	7.8	<1.9>	—	暗文、ヘラミガキ→黒色処理	付高台	完全実測	Ⅲ区
9	土師器	片口	—	—	—	—	—	ロクロナデ	破片実測	Ⅳ区ホリ
10	土師器	仏鉢	(21.6)	(9.4)	12.0	—	—	ロクロナデ	回転実測	カマド、H9-P5
11	灰釉陶器	環	—	(8.2)	<1.4>	—	—	施釉	回転実測	Ⅳ区
12	土師器	ロクロ環	(21.0)	—	<11.5>	—	—	ロクロナデ	回転実測	Ⅰ区
13	土師器	ロクロ環	—	(6.4)	<2.9>	—	—	ロクロナデ	右回転系切	覆土
14	石器・石製品	砥石	<11.3>	<7.7>	<2.5>	<233.0>	—	一部欠損、砥面敲5	完全実測	No1
15	石器・石製品	礫物石	10.7	5.0	3.8	302.0	—	—	完全実測	Ⅰ区
16	石器・石製品	礫物石	14.7	7.3	4.5	658.0	—	両側に捻り、使用痕有	完全実測	No2
17	石器・石製品	磨石	<9.0>	<6.3>	<3.5>	<292.0>	—	全周欠損、使用痕1	完全実測	Ⅱ区
18	石器・石製品	礫物石(片)	1.6	1.9	0.4	1.1	—	縁部に使用痕	完全実測	Ⅲ区
19	鉄器	刀子	<6.8>	1.1	<0.4>	<5.5>	—	基部欠損、木質付着	完全実測	No4
20	鉄器	紡錘車	<5.0>	5.3	0.4	<13.7>	—	一部欠損、孔径0.35	完全実測	No3

第12表 H9号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・装 飾		備 考	出土部位
			口径(φ)	底径(φ)	高さ(φ)	容量等	内 面	外 面		
1	土師器	環	(14.2)	6.5	11.3	—	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ	完全実測	No1
2	土師器	環	12.9	7.1	17.9	—	ナデ	ヘラケズリ	完全実測	Ⅰ区
3	石器・石製品	礫物石	11.0	6.4	3.0	340.0	—	一部欠損、砥面敲5	完全実測	覆土
4	石器・石製品	礫物石	10.7	5.0	3.8	302.0	—	—	完全実測	覆土
5	石器・石製品	礫物石	11.7	6.3	4.2	426.0	—	—	完全実測	Ⅱ区
6	石器・石製品	礫物石	12.0	6.7	3.7	445.0	—	—	完全実測	覆土
7	石器・石製品	磨石	<9.2>	<6.7>	<1.3>	<75.5>	—	全周欠損	完全実測	覆土
8	石器・石製品	素材	4.6	2.7	1.1	15.1	—	—	完全実測	Ⅰ区

第13表 H10号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・装 飾		備 考	出土部位
			口径(φ)	底径(φ)	高さ(φ)	容量等	内 面	外 面		
1	土師器	環	(11.1)	—	<5.0>	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ、ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ区
2	土師器	環	—	—	<10.8>	—	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区
3	石器・石製品	磨石	<7.1>	<4.4>	<1.6>	<63.8>	—	全周→裏面欠損、磨面1	完全実測	Ⅰ区
4	石器・石製品	磨石	<4.7>	<3.9>	<1.1>	<36.8>	—	全周欠損、磨面1	完全実測	ケン
5	石器・石製品	磨石	<7.3>	<5.0>	<2.2>	<138.3>	—	全周→裏面欠損、磨面1	完全実測	Ⅱ区

第14表 H11号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・装 飾		備 考	出土部位
			口径(φ)	底径(φ)	高さ(φ)	容量等	内 面	外 面		
1	土師器	環	(12.7)	(6.5)	<3.5>	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	Ⅰ・Ⅱ区
2	土師器	環	(12.4)	(5.2)	4.1	—	暗文→黒色処理	右回転系切	回転実測	Ⅱ区
3	土師器	環	(14.3)	—	<4.5>	—	—	割割「?」	完全実測	Ⅱ区
4	須恵器	環	(13.7)	(4.9)	4.8	—	火押	回転系切	回転実測	Ⅱ区
5	灰釉陶器	環	—	(7.1)	<1.6>	—	施釉	施釉、付高台	回転実測	Ⅲ区ホリ
6	土師器	ロクロ環	(25.0)	—	<16.0>	—	ナデ	ヘラケズリ	回転実測、7.5cm→8.5cm	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区
7	土師器	ロクロ環	—	(5.3)	<10.0>	—	ナデ	ヘラケズリ	回転実測、8.5cm→9.5cm	Ⅱ・Ⅳ区、ケン、P1
8	石器・石製品	打製石片	<5.3>	<4.8>	<1.5>	<40.1>	—	下部欠損	完全実測	Ⅱ区
9	石器・石製品	礫物石	11.9	6.9	3.5	393.0	—	使用痕有	完全実測	Ⅱ区
10	石器・石製品	磨石	<5.1>	<7.7>	<3.6>	<110.6>	—	全周→裏面欠損、磨面2	完全実測	Ⅰ区

第15表 D1号土坑出土遺物観察表

No	器種	器形	法				成形・調整		備考	出土層位	
			口径(径)	底径(径)	高さ(厚)	重量(g)	内面	外面			
1	須恵器	坏	—	6.3	<1.9>	—	—	ロクロナデ	右回転糸切	完全実測	覆土
2	須恵器	甕	—	(8.0)	<5.1>	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	覆土
3	石器・石製品	磨石	<5.8>	<5.2>	<1.1>	<60.9>	—	上へ左側欠損、磨面2、条痕有	—	完全実測	覆土
4	石器・石製品	磨石	<6.7>	<6.1>	<1.6>	<100.1>	—	全周欠損、磨面1	—	完全実測	覆土
5	石器・石製品	磨石	<8.4>	<5.7>	<2.5>	<158.9>	—	上部へ右側欠損、磨面1	—	完全実測	覆土
6	石器・石製品	磨石	<8.4>	<6.4>	<1.7>	<112.8>	—	全周欠損、磨面1、条痕有	—	完全実測	覆土

第16表 黒色帯出土遺物観察表

No	器種	器形	法				成形・調整		備考	出土層位	
			口径(径)	底径(径)	高さ(厚)	重量(g)	内面	外面			
1	弥生土器	鉢	—	4.1	<2.3>	—	—	赤彩	赤彩	完全実測	覆土
2	弥生土器	甕	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	磨面波状文	破片実測、拓本	覆土
3	弥生土器	甕	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	磨面斜走文	破片実測、拓本	覆土
4	弥生土器	甕	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	縄文	破片実測、拓本	覆土
5	弥生土器	甕	—	7.2	<6.9>	—	—	ナデ	ハケメ→ヘラミガキ	完全実測	覆土
6	弥生土器	甕	—	—	—	—	—	ナデ	ヘラ描斜走文	破片実測、拓本	覆土
7	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	—	沈線、縄文、中期末～後期初頭	—	破片実測、拓本	覆土
8	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	—	沈線、縄文、中期末～後期初頭	—	破片実測、拓本	覆土
9	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	—	沈線、円形突起列、後期初頭	—	破片実測、拓本	覆土
10	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	—	円孔、沈線、縄文、首絞1線、後期前半内1式	—	破片実測、拓本	覆土
11	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	—	沈線、波状1線、後期前半内1式	—	破片実測、拓本	覆土
12	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	—	沈線、縄文、後期前半内1式	—	破片実測、拓本	覆土
13	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	—	沈線、後期前半内1式	—	破片実測、拓本	覆土
14	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	—	沈線による幾何学文、縄文、後期前半内1式	—	破片実測、拓本	覆土
15	土製品	土器片円盤	4.0	4.0	0.9	—	—	縄文後期と思われる加文土器片の縁部を整形	—	破片実測、拓本	覆土
16	石器・石製品	打製石斧	<3.8>	<4.4>	<1.0>	<25.8>	—	上下欠損	—	完全実測	覆土
17	石器・石製品	磨石	<6.5>	<5.1>	<1.5>	<71.8>	—	全周欠損、磨面1	—	完全実測	覆土
18	石器・石製品	磨石	<6.8>	<5.0>	<1.7>	<104.5>	—	全周欠損、磨面1	—	完全実測	覆土
19	石器・石製品	磨石	<14.1>	<5.2>	<2.8>	<185.5>	—	全周欠損、磨面1、押痕有	—	完全実測	覆土

第17表 遺構外出土遺物観察表

No	器種	器形	法				成形・調整		備考	出土層位	
			口径(径)	底径(径)	高さ(厚)	重量(g)	内面	外面			
1	須恵器	坏盤	(14.0)	—	<2.5>	—	—	ロクロナデ	天井部回転ヘラケズリ	回転実測	ケン

第18表 試掘調査出土遺物観察表

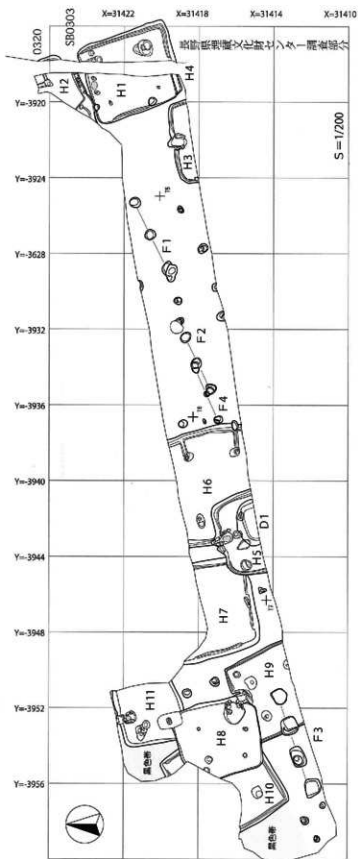
No	器種	器形	法				成形・調整		備考	出土層位	
			口径(径)	底径(径)	高さ(厚)	重量(g)	内面	外面			
1	土師器	坏	—	(4.8)	<2.0>	—	—	黒色処理	回転糸切	回転実測	ケン
2	須恵器	有台坏	(14.8)	(10.4)	3.4	—	—	ロクロナデ	付着台	回転実測	ケン
3	灰軸陶器	皿	(14.4)	(6.4)	3.2	—	—	施釉	付着台	回転実測	ケン
4	土師器	甕	(13.4)	—	<4.4>	—	—	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	ケン
5	土師器	甕	(21.2)	—	<7.8>	—	—	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	ケン

た遺物であり、本来は今回検出された遺構に帰属する可能性が高いものである。时期的には奈良時代から平安時代にかけてのものであり、器種的には土師器、須恵器、灰軸陶器である。

第三章 まとめ

今回の調査で検出された竪穴住居址の年代は、古墳時代後期(7世紀)、奈良時代前半(8世紀前半)、平安時代(10世紀前半)の3時期のものであった。隣接する中部横断自動車道建設に伴う西近津遺跡群(長野県埋蔵文化財センター)の遺構群も同様の年代である。また、H1・2号住居址は長野県埋蔵文化財センターが調査した遺構図との合成が可能であった。遺構の残存状態は比較的良好であったが、遺物の出土量は多くはなかった。そのような中で特筆すべきは、H5号住居址出土の緑釉陶器碗である。見込みに陰刻文が施されており、破片資料ではあるが佐久市出土の有文の緑釉陶器として希少な資料といえる。また、調査区西北端に広がる黒色帯からは縄文時代中期末から後期前半、弥生時代後期の土器片を中心とした遺物が多量に出土した。同様な黒色帯は隣接する西近津遺跡XⅢでも数ヶ所検出されており、同様な時期の遺物と少数ではあるが遺構が検出されている。

平野部における縄文後期遺跡の発見は、当遺跡が佐久市では初見であり、今のところ唯一の例であり貴重である。



第 25 图 全体图



H 1 号住居址完掘



H 4 号住居址完掘・H 1 号住居址掘方



H 2 号住居址完掘



H 3 号住居址完掘



H 3号住居址カマド完掘



H 5号住居址完掘



H 5号住居址カマド完掘



H 6号住居址完掘



H 6号住居址掘方



H 7号住居址完掘



H 8号住居址完掘



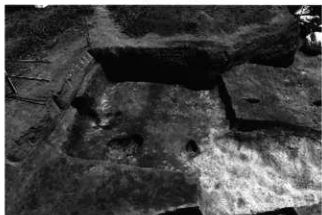
H 8号住居址カマド完掘



H 9号住居址完掘



H 10号住居址完掘



H 11号住居址完掘



D 1号土坑完掘



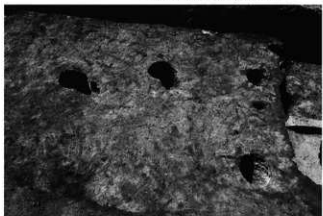
F 1号掘立柱建物址完掘



F 2号掘立柱建物址完掘



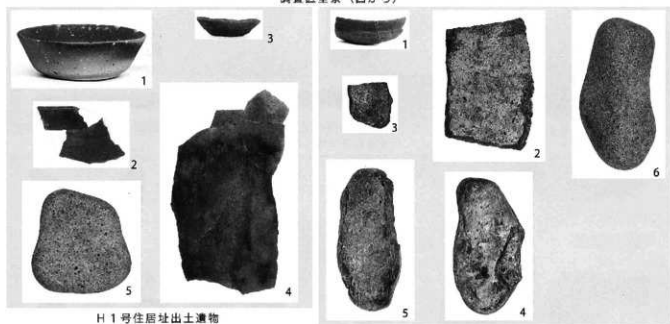
F 3号掘立柱建物址完掘



F 4号掘立柱建物址完掘

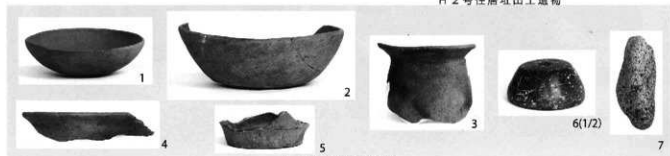


調査区全景（西から）

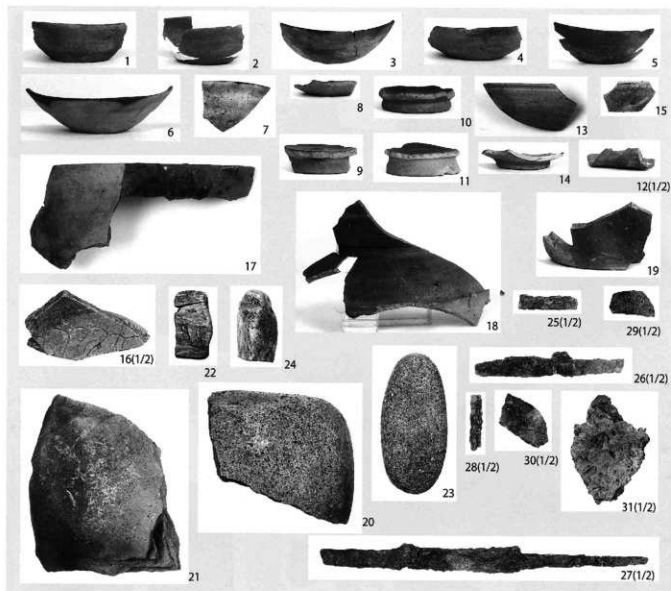


H 1号住居址出土遺物

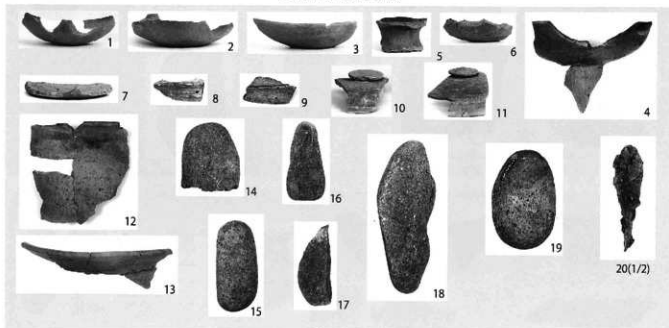
H 2号住居址出土遺物



H 3号住居址出土遺物



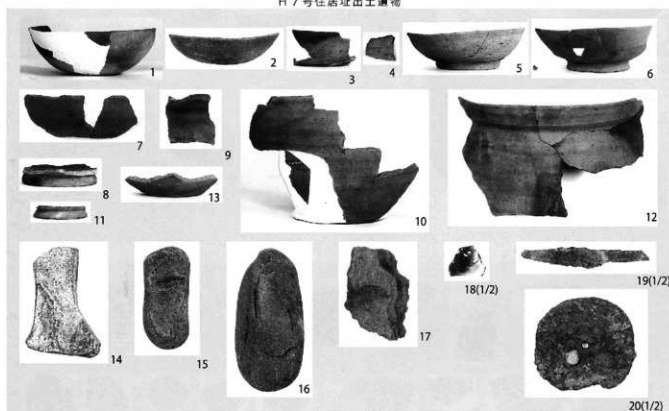
H 5 号住居址出土遺物



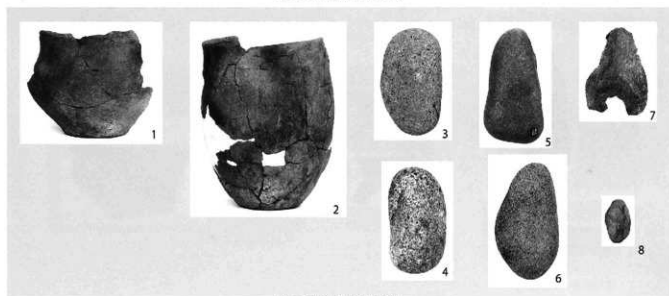
H 6 号住居址出土遺物



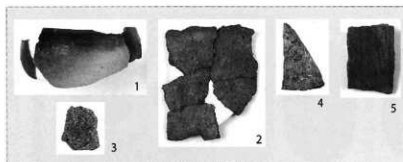
H 7号住居址出土遺物



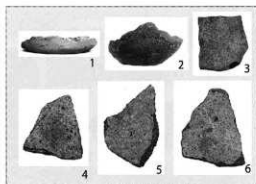
H 8号住居址出土遺物



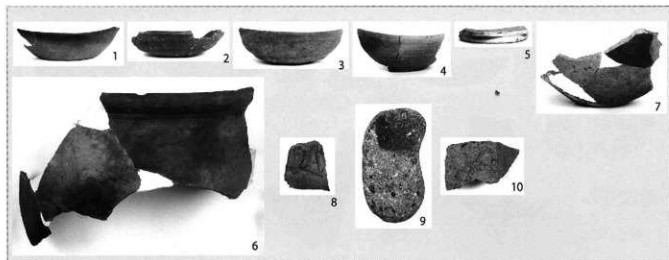
H 9号住居址出土遺物



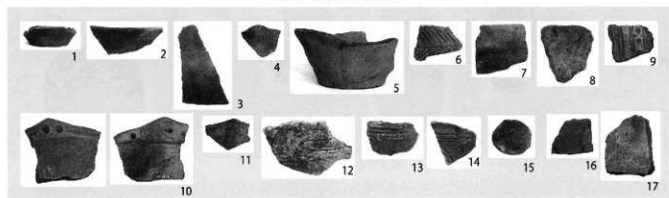
H 10 号住居址出土遺物



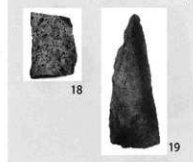
D 1 号土坑出土遺物



H 11 号住居址出土遺物



黒色帯出土遺物



遺構外出土遺物



試掘調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	にしちかついせきぐん にしちかついせき じゅうに							
書名	西近津遺跡群 西近津遺跡 X II							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 262 集							
編著者名	小林眞寿							
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込 2913 Ⅱ 0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	平成 31 年 (2019) 3 月							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
にしちかついせきじゅうに	さくしながとるあざもりした			36° 16'59"	138° 27'22"	平成 30 年 7 月 5 日～ 7 月 27 日	250㎡	宅地造成
西近津遺跡 X II	佐久市長土呂字森下 1784-1 外	20217	29					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西近津遺跡 X II	集落址	縄文 弥生 古墳 奈良・平安	竪穴住居址・11 軒 掘立柱建物址・4 棟 土坑・1 基 ピット・22 基	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 灰軸陶器 緑軸陶器 石器・石製品 鉄器	-			
要約	縄文時代後期の遺物が調査区北西隅の黒色土内（谷地形を形成するものと思われる）から出土。集落は古墳時代後期から平安時代にかけてのものであった。 H 5 号住居址から陰刻文緑軸陶器碗片が出土した。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 262 集

西近津遺跡群 西近津遺跡 X II

平成 31 年 3 月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒 385-8501 長野県佐久市中込 3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒 385-0051 長野県佐久市中込 2913

Ⅱ 0267-63-5321

印刷所 キクハラインク有限公司